

『天平の薨』論

—業行における「犠牲」の精神とは

劉 慧 子

はじめに

昭和三十二年『中央公論』の三月号から八月号まで、六回にわたって連載された『天平の薨』^①は、戦後文壇で頭角を現した井上靖が発表した長編歴史小説の第一作である。同年十二月に単行本が刊行され、翌年の二月に芸術選奨文部大臣賞を受賞した。「遣唐留学生」を取り扱ったことにより、「既に定まった流行作家の位置から歴史小説作家へ軌道修正」しようとする井上靖の意志がはつきりと認められ^②た作品だと福田宏年は指摘した。『天平の薨』は、この作家の「本格的な歴史小説」^③の第一作として、その重要性は疑いの余地がない。

この小説は、鑑真研究者の安藤更生の助力を得ながら、奈良時代の高名な文人淡海三船の『唐大和上東征伝』（鑑

真の弟子思託が撰した『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』三巻に基づいたもの）と『延暦僧録』、『続日本紀』、『万葉集』等を典拠として、律宗の開祖・唐僧鑑真の日本への招聘を主軸に展開している。そして、そこに関わった五人の留学僧を描いた壮大な物語である。鑑真に対して、作者は史料を的確に押さえ^④、史実に忠実な姿勢を貫いているが、五人の留学僧については、わずかに残された記録を参考にした故に、小説家の創造による部分が大きくなっている。従って、作者は留学僧にそれぞれ性格、役割を持たせ、彼等のイメージ、生き方、或いは運命の設定にいろいろと工夫を凝らしていると見えよう^⑤。

そうした留学僧像の中でも、業行はさほど多くの頁が割かれていないが、物語を彩る最重要人物の一人に数えられる。例えば山田博光は業行の人物像について、「努力」

する人間に井上靖は「無言の賛辞を捧げている」と述べ、井上靖の義父足立文太郎と画家荒井寛方が原型であると主張した^⑥。このように歴史上では無名であった留学僧たちの「努力」に注目した論考は多い^⑦。が、本論では作者が多用する「犠牲」という言葉に留意したい。「努力」は一種の〈生き方〉であり、ある人生を貫く〈過程〉であるが、「犠牲」は作者が作中人物に与えた一つの〈運命〉であり、人生の〈結果〉を示すものと言える。中でも膨大な経巻類と共に一身を滅ぼしてゆく終焉の場面で、普照は業行の「悲痛な絶叫」を耳にしている。その残酷な〈運命〉から滲み出るような悲哀と「喪失感」が実は巻末に強調されているのである。従って、經典を写して持ち帰る使命に没入している業行の中にあふれる情熱のみならず、狂気に迫る形相の裏に執着し続けているもの、また業行の痛ましい犠牲の運命に込められているものを考えなければならぬ。以下業行という人物設定に着眼しつつ、考察を進めてみることにする。

一、「奇怪な人物」業行における〈日本〉

『続日本記』巻二十四の中に、業行について以下のように記載されている。

和上者揚州龍興寺之大德也。博涉^二經論^一、尤精^二戒律^一。江淮之間、獨為^二化主^一。天竺^二載、留学僧采叡^一・業行^一等、白^二和上^一曰、仏法東流、至^二於本國^一。雖^二有其教^一、無^二人传授^一。幸願、和上東遊興^レ化。辞旨懇至、諮請不^レ息。乃於^二陽州^一買^レ船入^レ海。而中途風漂、船被^二打破^一。和上一心念仏。人皆頼^レ之免^レ死。至^二於七載^一、更復渡海。亦遭^二風浪^一、漂^二着日南^一。時采叡物故。和上悲泣失明。勝宝四年、本國使適聘^二于唐^一、業行乃説以^二宿心^一。遂与^二弟子廿四人^一、寄乘副使大伴宿禰古麻呂船^一帰朝。^⑧

鑑真渡航の経緯を簡潔に伝えるこの一節を読むと、業行は采叡と一緒に戒師の招請に尽力する人物であることがわかる。しかし、『唐大和上東征伝』の中に業行のこ

とは一切言及されず、鑒真の「東遊」を要請する留学僧は普照と栄叡の二人であることはすでに判明した事実である。『続日本紀』に記入される業行の名は普照の別名であると推測できる。井上靖は歴史に名を留めるだけの「業行」を巧みに生かし、わずかな歴史根拠に基づいて、一個の独立した人格を築き上げたのである。作中における業行の人物像と行動に視線を注ぐと、書き手の歴史認識に関する深い情報を読み解くことができる。

業行以外の四人留学僧は、天平五年（西紀七三三年）、授戒の師を連れ帰る任務をもって、第九次遣唐使に随行して唐へ渡った。戒師を迎えようとした日本の態度は、安藤更生が指摘したように、「宗教的なものばかりではなかった。政治的な根因の内在する要求だったのである」^⑨。僧尼の墮落した行儀を肅正することと、横行した行基一派への弾圧は当時の日本にとって至急の政治課題であった。初出における栄叡の「われわれの使命は多分に政治的なものだ」という発言もこのことをはっきり示している。だからこそ重大な国家使命を背負う留学僧達は荒海に向かって出航したのである。

唐へ渡った後、普照らは玄昉、下道真備、景雲、業行ら四人の先輩達に会い、それぞれ学業の研鑽状況を目にする事ができた。紫の袈裟を賜った玄昉は、陰陽、歴史、天文諸学を研鑽する下道真備と共に盛名を馳せている僧となっていたが、同じ僧服を纏っている六十歳の景雲は老残の身一つを日本へ運ぶしかない。本人は栄誉と恥辱を気にしなくても、若き留学僧の目には、それは「哀れに愚かに見えた」。それと同じ功を成し得なかった業行という僧侶も、他人に異様な目つきをされていた。彼の登場は、景雲、玄朗、栄叡の三人によって導き出されたのである。

まず、普照と玄朗を目の前に置いて、景雲は感慨深そうに「彼にもとうとう陽が当らなかった!」と語った。些か哀れみが含まれる景雲の言葉には少なくとも二つの意味が読み取れる。一つは、業行の冷たい陰惨な写経環境と脆弱な身体を指している。もうひとつは、景雲と同じ何にもならなかった人生、そして報いられずに終わった運命をそれとなく示している。

次に業行の様子を探りに来た玄朗は、「この方はちよっ

と変っている」「兎に角変っている」「変っている」は初出で「怖い」と書かれる。」と言葉に説明できないほど驚きの態度を示した。同じように、栄叡も業行という人間の実態を捉えにくく、「豪いのもしらんが、莫迦かもしらん」と当惑していた。二人の目に「奇怪な人物」として映じている業行は、神秘的な雰囲気にも包まれて登場してくるのである。

郊外の寺を訪ねてきた普照の眼に映っているのは、冷寒、陰惨な部屋、乱雑に置かれてある古文書の束、そして老け顔で貧弱な体つきの業行である。

「五十歳近いであろうか。小柄で、脆弱な体があるまま老い込んでいたので、年齢のほど確とは判らなかつた。風采はひどく上がらなかつた。」

「この間来られた、何といたしましたかな、あの方のお連れですか」

業行はほそっとした口調で言った。秋の初めではあり、まだ寒さが感じられる季節ではなかつたが、彼は坐っている両膝の下に左右から手を差し込んで、体を

細かく震わせていた。

(中略)

業行の顔は、普照が唐土へ来て見る一番唐土とは無関係な顔であつた。業行は全く日本人の顔をしていて。顔ばかりでなく体も小さくて貧弱で、日本の到るところで見る百姓の体つきであつた。(第一章)

小説の冒頭から終盤まで、業行が登場するたびに、その貧相な姿が繰り返し強調されている。物語の展開につれて、業行の姿は「脆弱」→「老衰」→「不具者」→「ひと廻り小さくなっていった」→「背の曲がった貧弱な老人」との順で変化していく。にも拘わらず、業行は自分の外見の変化に気になる様子を見せていなかった。或いは正確に言うと、外見のことなどかえりみる暇がなかつたからではないか。唐土で十七年生活した下道真備は、普照には、皮膚の色も眼の色も「日本人より寧ろ唐人に近い」印象を与えたのに対し、業行の顔は意外にも唐土とは無関係であつたことに注目したい。三十年間異国の風土に晒されていたが、唐人の特徴が些かも染みついてなく、

「全く日本人の顔」をしているのである。人間の内面はいつも顔に出る。業行は何に執着しているのであろうか。

以下、業行が写経に取り組み始めたきっかけについて、文脈を辿りながら探ってみよう。

普照は業行と初めて出会った際、以下のような会話を交わしている。

「何をやっておられます」

「これです」

業行は机の上の方へ顎でしゃくるようにして、

「まだ、なかなかです。始めたのが遅かったです。

自分で勉強しようと思って何年か潰してしまったのが失敗でした。自分が判らなかつたんです。自分が幾ら勉強しても、たいしたことはないと早く判ればよかつ

たんですが、それが遅かつた。經典でも経疏でも、い

ま日本で一番必要なのは、一字の間違いもなく写されたものだと思うんです。いまでも随分いい加減なもの

が将来されているんでしょ」

この時だけ、業行は早口ではあつたが、**自分の意見**

らしいものを言葉として口から出した。その間も貧乏ゆすりは相変わらず続いていた。(一章)

業行は「経卷」に生涯をささげていた。今まで「日本」に将来されていたものに不満を抱え、自分の勉強能力の限界を意識した後、研鑽を諦めて、現在「日本」で「一番必要」なものを持ち帰ることに重く使命感を感じ取っていたからであつた。いつも曖昧な返事をした業行は、初めて「自分の意見らしいもの」を口走つた。その言葉には、写経は母国に力を尽くそうという気持ちから出発したことが読み取れる。それを実践する方法として、業行は一字の間違いもない古文書を筆写することを自分に課し、また信念として、命を懸けてでもこの仕事をやり遂げようと執着したのである。三十余年の歳月に熱意をかけ、明けても暮れても書き写した「経卷」は、「恰も業行を世俗世界から遮断している壁のように、きちんと整頓されて彼の机の周辺に堆高く積み上げられてあつた」。経卷類の中に身を埋めている業行にとって、歴大な筆写本は城砦(初出では「壁」は「砦」と表示する)

のごとく、異国僧業行の世間離れした禁欲的な生活を守っている。

次に業行が写した経巻類を日本へ持ち帰ろうとする経緯について少し考えてみたい。

異国の土を踏んでから十年の歳月が流れ、普照は突如帰国を思い立った。丁度それと重なるように、思いがけず業行の来訪を受け、帰国する方法を尋ねられた。窺れている業行のはっきりしない喋り方と低い声の中になんとなく「思い詰めたもの」を、普照は感じた。数日後、禪定寺を訪ねて来た栄叡と普照に、業行は経巻を他人に預けたくない理由をこのように述べた。

「人に頼めるといいんですが、併し、いざという時にはこの経本の身替りになって、自分の体を海に投ずる人でなければ困ります。そういう人はいないでしょう。やはり私が持つて行くよりほか仕方がないんです」と言った。ぼそぼそした口調だったが、あるきびしさがあった。栄叡にしても普照にしても、返す言葉はなかった。(二章)

経本を日本へ持ち帰るためには、いつでも自己を犠牲する覚悟が必要だと業行は考えている。経本と比べると、人間の死は鴻毛より軽いものである。この時、返答に詰まる栄叡、普照の二人はまだそのような精神の境地に達していなかったことが明らかである。伝戒の師に熱中している栄叡と違って、普照は「自己完成」を戒法の招請とも、業行の経巻類とも、「取り替える気にはなかった」。その考え方を変える鍵となる人物は、生命を惜しまず即座に渡海のことを応答した監真である。死に際して悠々たる監真の態度から、普照は「奇妙な、名状し難い酩酊感」を感じていた。生死を度外視する精神の輝きに魅せられていたのかもしれない。

そこで、渡航の準備が整ってから、普照は改めて業行を探し出し、あの龐大な経巻類の一部を船に積み込みたいたことを説明に来た。普照に面して、業行は言った。

「なるほどおっしゃる通り、あれは幾つかの便船に託すべきものでしょう。何も私と一緒に日本へ渡らな

ければならぬ理由はない。要は無事に日本へ渡りさえすればいいんです。貴方がたが確実に日本へ着くというのならお預けしましょう」

と言った。(三章)

ここで、業行は幾つかの船便に託すことを承諾する条件として、無事に「日本」に到達することを何度も強調している。普照が万が一の場合、経巻のために献身することを保証するに至って、業行はようやく納得して経巻を渡したのである。

ところが、渡日計画が思いがけず挫折し、一行は海南島へ流された。業行から託された経巻類の木箱二個は仕方なく大雲寺に収めることになった。普照はこのことを洛陽に滞在している業行に会って話すと、業行は「ひどく不機嫌な顔」になり、「歩きながらがたがたと体を震わせ」、あの経巻類を「そんな南の国の名も知れない寺」に置いたことを、「明らかに烈しく非難する口調」で普照と立ち向かっていった。業行のこのような激しい感情が沸き上がるのは思いのほかであった。この時、普照は次

のように弁解していた。

名も知れない寺といっても、大雲寺は振州では一、二の名刹です。海底の藻屑になったわけではなく、あの経巻類は現在、この唐土にあつて、仏陀の功德を説いております。そのことで諦めて戴けませんか(第四章)

僻陬の大雲寺と言っても、あの経巻類は海底の藻屑と消えたのではなく、この唐土において、依然としてそれなりの価値が発揮できると普照は訴えた。唐土は留学僧たちにとって、何十年、或いは一生を送らねばならぬ第二の故郷と呼べる場所かもしれない。その意味において、「国」の問題を気にしなくてもいいだろうというのが普照の態度であった。この弁解に対し、業行は若干譲歩したが、「国」について「日本」への執拗は変わらず、少しも妥協の意を示さなかった。

あれは日本へ持つて行くための経巻です。なるほど

仏像以外一物もない辺土の寺へ納めたとすれば意味はあるでしょうが、併し、あれは日本へ持って行くために、私が生涯をかけた仕事の何分の一かです。(四章)

経巻の置き場として、業行はどうしても母国を要求し、そして、普照のやり方を許さなかったばかりか、ますます憤懣なる気持ちになった。数年後、写経の仕事に取り掛かっていた普照は義浄訳の經典の在所を業行に尋ねた。その際に、經典を採す労を省こうとする普照に対し、「業行の気難しさは、暫くの間に一層烈しいものになっていた」。病床に臥していた業行は、經典のことに對して今もなおお氣にかけている。

普照は振州の大雲寺へ業行が写した二箱の経巻を納めて来たことに對して、業行の怒りがまだ消えていないことを知った。(五章)

このように見てくると、業行の写経が単に仏陀への供養と簡単に結論づけるのは適切であるまい。「仏」のた

めとはいえ、業行には(日本)が念頭にあり、(日本)の現状を改善するために価値のあるものを持ち運ぶことを志す。自分を押し殺しながら、骨が折れるほどの苦勞を厭わず、思慮の限りを尽くして、自己犠牲を払ってでも大切な経巻を(日本)へ持ち帰ろうとする業行の決心は、国という意識、或いは国家的な使命感があつてこそのものであつたらう。

二、「犠牲」になる運命

黄泗浦から出発し、業行の乗っていた副使吉備真備の第三船が六日目の夜半阿古奈波島に到着した。ここで第二船に分けられた業行は不服を示し、他人に手間を取らせるのを顧みず、携行する経巻を条件の良い第一船に移らせた。第一船がついに日本へたどり着かなかつたことは紛れもない歴史上の事実である。敢えて業行をこの船に移したところに作家の意図が表れている。業行の最期について、小説では彼の死を直接言明していないが、阿

古奈波島の台地で普照と業行の最後の対面を描くことによつて、業行に間もなく訪れる死が暗示されているよう。

潮風に吹かれながら、暮方の海を見降ろしている「一人の背の曲つた貧弱な老人」業行は、異国の風土において日本人の姿をしつかり守っているうちに、ついに「唐人でも日本人でもない」変わり者になつた。その容姿の变化から、業行の内面における矛盾と葛藤、煩惱や忍耐、失望と期待などの複雑な情感が想像できる。この時、普照に船を替える理由を説明する業行は狂気じみた執着心を捨てず、再び「あれだけは日本へ持つて行かなければならない」と母国のためであることを強調した。さらに自己陶醉のように、日本の土を踏もうとしている経典のことを想像し、やがて低く呟くような口調に変わつていった。

「阿弥陀仏の前、内陣には二十五菩薩を象つて二十五个の花が撒かれる。日本では、菊・か・椿の花が。そして五如来を象つて五葉の幡が吊り下げられる。そして――」

二十五菩薩とは臨終の際に、死者を西方極楽浄土へ導く為に迎えに来る菩薩の一団である。二十五菩薩を象つて二十五个の花について、業行は「菊」と「椿の花」をも言及し、そして、呟くように「伎楽」「舍利」「香水」といった言葉が漏れている。この時、「陽がかけると潮風が寒かつた」。これらの描写は膨大な量の経巻類とともに海底に沈む業行の死を暗示しているよう。

経巻が潮の中へ転がり落ちて行く場面は普照の夢幻の形で抒情的に描かれている。船は波濤の頂きと谷の間を木の葉のように弄ばれ、巻物は一巻一巻、碧色の藻が揺れ動いている海底に落下していく、その描写はあたかも映像を見るかのようなものである。業行の死は、遭難の第一船の生存者に彼の姿がなかったことから、その「犠牲」が確実なものであるとわかつた。このような悲運な最期に對して、作者はどのような態度を取っているのであらうか。

鑒真を伴つて一人で帰国できた普照が、曾て自分と一緒に唐へ渡つた旧友を懐かしく思う幾つかの場面があ

る。それらの場面です。最初に思い出したのはまさにこの業行である。東大寺の写経所で鑑真が将来した経疏を写している僧侶の姿を覗いた普照は、曾て同じ姿勢で机に對つた業行のことを思い浮かべた。

普照の坐っているところからは縁越しに小さい中庭が見え、そこに**椿の木**が遅咲きの花をつけているのが見えた。室内が暗かつたので、その花はひどく赤く見えた。普照は阿古奈波島の台地の上で最後に業行に會つた時、業行が憑かれたように内陣に二十五菩薩を象つて二十五の花を撒くというようなことを口走り、確か、その時**椿**という言葉が彼の口から漏れたことを思い出すと、ふいに**悲しみ**とも**怒り**ともつかない感情が**烈しく**五体に突き上げて来るのを感じた。普照は起き上がって、静かに写経所を出た。(五章)

最後の対面で、業行が言い漏らした「椿」という言葉は再び言及され、普照の突発的に起こつた「悲しみとも怒りともつかない感情」と深く関わっている。中庭のひ

どく赤い椿の花を目にしている普照の気持ちを少し究明するために、井上靖の「椿」^⑧という詩を見ておこう。

(前略)

真紅の固塊が、次々に枝をはなれ、充分な重量感を以て、地球の表面に落下している。午前中に三個、午後、五個、あらゆる詩的抒情を、峻烈に拒否して、真紅の固塊は、地球の引力と、己が重量に依つて、位置を替えている。

落下した真紅の花は、まさに息絶えた屍体。その赤い固塊を置いた地面は、まさに地表、地殻の表面。そこに点々と、真紅の屍が散らばっている。どこか、戦場に於いて倒れた、決死隊員の屍体の散乱を思わせる。

椿は平成の花ではなく、**昭和の花**である。**昭和の暗さ**と、**昭和の重さ**を、この花は持っている。

「椿」は合弁花といつて、五枚の花弁が下部で繋がっているため、一枚の花弁が萎れても、他の花弁が萎れて

いない間は花卉は落ちない。五枚のうち最後の花卉が萎れる時に、同時にすべての花卉が落ちる。その散り方は、人の首が落ちるかのようである。それ故に庶民の間では、屋敷につばきを植えるのは不吉なこととして忌まれがちである。椿の花はよく寺や墓に見られるので、「死」のイメージと結びついているともいえよう。改元にあたって、井上靖は詩の中で激動の昭和時代を振り返り、落下した真紅の「椿」を見て地表に点々と散らばっている決死隊員の屍体を想起する。昭和という時代に生きる中で、

井上靖は世界恐慌の青春時代を経て、戦場に駆り出されて絶望的行軍を強いられ、周囲にいる友達を次々に失う悲しく痛ましい経験をした。かつて四高柔道部の仲間たちは、「大学を卒えて、召集を受けるや、その若い生命を、次々に、次々に、大陸や南方の新戦場に散らせている」。「四高時代から今日までに、いつか、半世紀という茫茫たる歲月は流れているが、私の場合、往年の若い仲間たちの最後の姿だけは、それぞれ、いつでも眼に浮かべることができる」^⑧。戦場から生還した井上靖は、異国に赴いた若い青春の友への想いを久しく拭えなかった。明

治、大正、昭和、平成の四代にわたって生きた井上靖にとって、「昭和」は暗い、重い、あたかも椿の花の持つ重量感のある時代であったのである。

井上靖は「船のこと港のこと」^⑨という随筆の中で、「天平の薨」における留学生、留学僧たちは「文化特攻隊」といふべきだと主張し、彼らはまさに「国家的事業でもあり、国家的冒険でもあった文化特攻隊の四艘の船」に生命を賭けて乗り込んだ隊員であると綴った。千年以前の遣唐使の時代には日本の造船や航海技術がまだ十分に発達していなかった。留学僧たちは再び故郷の土を踏めない覚悟と決心をして、いわゆる決死隊の精神をもつて先進国唐へ出発し、国家創成期の日本に貢献した。その過程において、無数の若者は歴史の捨石となり、栄誉が発した言葉のように、「何百、何千人の人間が海の底に沈んで行ったのだ」。当初は勉学を目標とする「自己本位型人間」であった普照さえも、徐々に業行の方へ近づいていき、やがて「献身型人間」^⑩へと大きな変化を見せた。井上靖の作品における幾人の留学僧は、それぞれ違った運命を辿ったこれらの人間の「代表」として描か

れたのである。

井上靖は「天平の菟」の登場人物^⑧という随筆の中で、玄明、業行、戒融のような「若い」留学僧は、実はみんな「代表」として小説の中で登場させたと明言している。例えば業行と戒融について次のように記した。

恐らく業行のような不幸な人物は一人ではなかったと思う。沢山の業行が居たに違いないのである。私はそうした人物を代表して、業行に『天平の菟』に登場して貰ったのである。戒融という留学生もまた同様である。大陸に渡ると同時に大陸の大きさに取り憑かれ、他の生き方をしようとして、帰国の心を失った青年である。一種の大陸浪人的人物ではあるが、こうした青年も亦戒融一人ではなかった筈である。

こうしたいろいろな運命を持った若い留学生、留学僧の犠牲の上に、天平の輝かしい大陸からの文化移入は為されたのである。これが小説「天平の菟」の主題であるが、果してそうした作者の意図が出ているかどうか。

『天平の菟』における留学僧たちに対して、作者は「犠牲」や「青年」（あるいは「若者」「若い」という言葉を強調していることに注意されたい。映画「天平の菟」のスタッフ座談会で、井上靖は二百年間に十八回の遣唐使船が出航した天平時代は、「日本の一番面白い時期だ」と思い、「その時期の青年たちを書きたかったわけ」だと述べた。^⑨小説で異境に旅立っていく留学僧は、みんな二十代、三十代の若者で、まさに夢や情熱に満ちた青春時代の最中にあるが、命を犠牲にする恐れのある国家的使命を担うことになった。置き去りにされた家族は港湾を出る船を見送りに来て、「女の多いのが目立っている。老婆も、若い女も、子供も居る」と作者が書いたように生別を余儀なくされている。天平の輝かしい文化、或いは国の一時期の繁栄は、こうした目に見えない若い留学僧の「貴い犠牲」^⑩に於て花咲いていたと井上靖は伝えたい一方で、そこに与えられたおのおの運命はやはり非情で残酷すぎるとも考えている。『天平の菟』の前篇と目される「僧行賀の涙」では、唐朝に仕えた藤原

清河が日本へ帰国しない理由について、「自分と一緒に難破した百何十人かの間人は、大方溺死するか、土人に殺されている。私が一人帰ったら、私の妻子は悦ぶが、彼等の妻子は何と思うだろう」と説明している。また、帰国の船が立つ前に、清河は二十歳の娘嬉娘を連れて行賀を訪問する。その際に、嬉娘は父と離れて住むのは嫌だと打ち明けつつも、「父は、父と離れて住む気持を知らなければ不可なりと言うのです。」^⑧と語っている。これらの描写から見ると、『天平の薨』の登場人物たちも同期の留学僧の「犠牲」のことを気にかけていると言えよう。妻を娶って帰国を断念し、「自分の現在の身の上を恥じて」いる玄朗も同じように考えているのではない。無事帰国できたとしても心苦しく、仲間達に申し訳ない気持ちでいっぱいであるかもしれない。普照は落下了した真つ赤の椿の花を目にしながら、業行は死んだという痛ましい現実を感じ取った。そして、業行が私欲のない人生と無残な死に方を強いられた事実には憤慨を覚えて、「悲しみとも怒りともつかない感情が烈しく五体に突き上げて来るのを感じた」のであった。

このことに関連して、更に個性が際立った托鉢僧戒融からある抵抗を読みとることができよう。不遜で孤高に生きる戒融は運命に従わず、權威などに勇敢に立ち向かっていく気概のある男である。彼は周りの人に流されず、いつも一人で自己の信念と目標を目指して突き進んでいる。業行と同じように、戒融もそれほど多くの紙幅を割いて描かれていないが、最も奔放でありながら思慮深く、洞察力に富んだ日本僧と言える。鑒真招請と帰国の行列に入らず、外側に立つこの僧は、普照らの一行へ何回も奥深い質問を投げかけていた。船酔いの海上では「何を考えている?」、烈しい暴風雨に襲われた夜には「何を考えている?」、唐の洛陽では「唐へ来て、何を一番強く感じたか」「一体、お前らは何のために唐へ来たんだ。何をやるつもりなんだ」と唐突な問題を次々に聞きたした。渡日計画が挫折し、禅林寺の滞在期間中の普照と再会した際には、また「何のためにこんなところをうるついているのだ」と訊いたのである。自分を一行から除外し、「お前ら」「何」という表現を頻繁に使用することから、戒融は始終局外者のように遣唐使派遣のこと

を凝視していることがわかる。答えに慎む普照と違い、戒融は物事を恐れず、「死ぬのはごめんだ」「犬死は嫌だ」「死ぬのはまっぴらだ」と言い、また「経典の語義の一つ一つに引懸かっている日本の坊主たちが、俺には莫迦に見えてきた」などと本心を堂々と打ち明けた。戒融は遣唐船に随行しているが、日本僧の重要使命、言い換えると、国家的任務の遂行については最初から関心を示していなかった。その率直な台詞と行動を通して、組織への一種の反発、一種の抵抗が窺われよう。

三、「薨」が映し出す異境の人生

題名のキーワード「薨」が初めて読者の目に飛び込んでくるのは、奈良の都を屈指している普照が馬の背に揺られながら森蔭の「寺々の薨」が目に入った時である。建築の上棟に使われている「薨」は、末尾の遣渤海使小野田田守が持って帰って来た一個の瓦製の異形の物件に呼応している。大乱の唐国を出て、渤海を渡って日本へ

届けられたこの「薨」について、作者は普照の目を通して追憶のような形で描写している。

薨は寺の大棟の両端に載せる鴟尾であった。古いもので方々がかけている上に太い一本の龜裂がはいっていた。普照にはこの鴟尾の形には微かに記憶があった。唐のどこかで見たものに違いなかった。普照はそれを思い出そうとしたがどうしても思い出すことはできなかった。彼が入唐早々二年余の歳月を送った洛陽の大福先寺でみたものか、あるいはその後長く止住した長安の崇福寺で、あるいはまた鄴山の阿育王寺でみたものか、はつきりした記憶はなかった。併し、いずれにせよ、かつて何回も何回も眼にしたものであるか、あるいはそれに似通っている形態を持ったものであるに違いなかった。(五章)

普照の名宛で一個の送主不明の物件は、唐招提寺の大棟の両端に取り付ける飾り物「鴟尾」、即ち「薨」である。そこに井上靖は「自分かつてな解釈ではいつている」¹⁸⁾

中国側の研究では、これまで「薨」は鑑真を象徴していると考えられる説が多かった。だが、唐招提寺が完工されてから四年目の天平宝字七年、鑑真の弟子忍基が講堂の棟梁が挫ける夢を見、のち鑑真が寂したと書かれている本文から判断すると、「棟梁」こそ鑑真を象徴していると言えよう。その上で、この「薨」は「古い」「方々がかけている」「一本の亀裂」という三つの特徴があることに目を向けたい。それを見ている普照は洛陽の大福先寺、長安の崇福寺、鄮山の阿育王寺を思い出し、これまでの人生を振り返るような姿勢を見せている。つまり、普照が追憶しているのは、遣唐留学僧としての異国における人生や経歴である。その体験は、かつて普照、栄叡などと同じように、激情に駆られて死ぬことを覚悟しながら荒海を渡って、異境の地に青春の熱血と炎ゆる情熱を注いだ留学僧たちの人生ともそのまま重なる。「古い」は唐土での生活の長さを意味し、「方々がかけている」は不平穏で、円満ではない人生を象徴する。途中の風雨で海に巻き込まれたものごといたり、病気で異郷に骨を埋めるものごといたり、苦勞の末無駄な一生を送った人間もい

る。「一本の亀裂」は帰れなかった留学生の心の中に、大海のように日本と唐を隔ているものが横たわっていることを表しているのではないかと思われる。屋根に葺いた一枚一枚の瓦が代表する一つ一つの異国での人生には、多くの艱難辛苦が込められている。そのような「薨」、そのような無数の若者の献身によって築かれていく歴史を忘れてはいけなさと作者は主張しているのである。

井上靖文学には、「異域」を舞台に展開していく物語が多い。主人公はどんな心境で異郷の地と立ち向かい、また異域の旅を経て、つまり空間の移動と時間の推移を通して何が変わったのか、何が変わっていないのか、私たちが検討すべき課題である。そこには、作者自身の異域体験が土台として存在しているのである。特に最初の中国体験は小説を書き始めてから、作者の心に色々と醸酵されていたと言える。「無事に帰ってきている人はいるな意味でたいへんなものを野戦生活からもらっています」、「大陸の自然からも、その体験からも、一生を支配されるようなものをもらいました」^⑧と井上靖は告白していた。ところが、その軍隊体験を井上靖は滅多に語

らなつた。「俺はね、この体験を幾度か活字にしようと思つたけど、やっぱり止めた。この死体にも、気がふれた人達にも家族がいると思つたと、書けなくなつた」²⁸と語っている。しかし、井上靖は戦争について、小説の中で決して触れなかつたわけではない。「こんなことをして死ぬのはいやだと思つた」²⁹と言つた作者は一兵士として戦争に左右される人間の死へ嫌悪を明らかに表していた。その気持ちは「犬死は厭だ」と海上に漂つていた戒融と一致している。また、唐へ来て初めて見たのは飢えてゐる人間だと言つた戒融の中国への第一印象も、最初に感じた戦争中の中国の印象とも重なつてゐる。それほど、大陸に渡ると同時にその広大さに取り憑かれる「大陸浪人の人物」戒融という人間の構想は、平成二十一年に公開された「井上靖中国行軍日記」の「十一月十九日」に、元氏の城壁で雪景色に覆われる興亡山河の大きさを感じ、「支那浪人というのはこの変な大きさなものに一生とりつかれてゐるのだらう。」³⁰（支那浪人は大陸浪人とも称されている）と記していることと関係があると思われる。また、前述の鑑真の言葉から普照は死を度外視

する一種の酩酊を感じたと言つてゐるのは、詩歌に「あの北支永定河の川波に乱れ散るこの世ならぬ白い陽の輝きに、ふと生命惜しからぬ戦いの陶酔を味わつた」³¹という体験に通じるだらう。更に、井上文学における「雪」「幻覚」「落日」「暁闇」などには戦争体験の跡が随所に垣間見える。業行のような人物は更に西域で匈奴と戦つた班超（「異域の人」）、また多くの労苦と辛酸を舐めてからようやく帰つてきた行賀（「僧行賀の涙」）のイメージと通じるところがある。「胡人！」「学殖膚浅！」という蔑称を浴びてしまつた二人の身の上から浮かべる悲しみと痛みが行間から伝わつてきた。

おわりに

井上靖は、金堂の両端に聳える鴟尾を頭の中に浮かべながら、想像の翼を広げ、その由来を遡つて『天平の薨』の執筆を進めた。登場人物を見ると、主役はすべて男で、女性が一人も登場していない。国家的使命を背負つ

て遣唐使船に乗り込んだ日本奈良平安期の青年留学僧たちは、「文化特攻隊」の隊員のように生命を賭して、溢れるばかりの情熱を満載して渺漫たる大海を渡って異域に漂着した。そこで異なった運命を辿った人間の代表として、作者は業行、戒融、玄朗のような若者を『天平の薨』に取り扱ったのである。国の一時期の繁栄は、こうした無名の人間の貴い犠牲に於て花咲いていくと井上靖は伝えたい一方で、そこに与えられた運命はやはり非情で残酷すぎるとも考えている。その中で、特に夥しい写

経本と共に波間に沈んでいく業行は最も痛ましい「犠牲」を払った。変挺で気難しい老僧業行は、個人的欲求を押し殺し、三十年間の情熱を全部写経に注げた。書き写した経巻は国の文化発展に捧げるブリックのようで、身を埋めるような高い壁を築き上げた。その出発点には(国)に尽くすという強い使命感を抱えていることが読み取れる。初心を守り続く過程において、業行の容姿は老衰の兆候が顕著に現れ、狂人のごとき相貌へと変わってしまい、最後は半生の努力が無駄になったという厳しい運命を強いられた。作者はこのような狂氣的な執着と忍苦の

人物を通して、日本の奈良時代、つまり国家の創成期の姿をそれとなく物語っているようである。また、これらの人物を借りて歴史を裏で支えた人間への感嘆をしながら、昭和時代の波間に生きる人間の非情な運命を振り返って見ていたと考えられる。

注

①本論における『天平の薨』の作品本文の引用は『井上靖全集』第十二卷(東京・新潮社、一九九六年)による。初出は「中央公論」三月号～八月号を参照。引用中の傍線、太字などは筆者によるものである。

②福田宏年、「天平の薨」(『井上靖評伝覚』、東京・集英社、一九七九年九月、第一九五頁)。

③『わが文学の軌跡』(中央公論社、一九七七年、第一四三頁)における「歴史のなかのロマネスク」と題する一節で、「『天平の薨』のときは、本格的な歴史小説を書いてみようという気持ちはありました」と井上靖は発言している。

④一九六二年十二月に書いた「鑒真和上のこと」（『井上靖全集』第二十五卷、第六五四頁）というエッセイにおいて、井上靖は、「東征伝に伝えられているその行動をそのまま書き、その中に記されている鑒真の言葉を、そのまま紹介するだけで十分であった。」と書いている。また、山田博光は「極端に言えば、鑒真に関する部分は、『東征伝』の翻訳といってもよい。」と述べた。（井上靖『天平の甕』、『国文学解釈と鑑賞』、一九七〇年、第九八頁。）

⑤発表後、井上靖は雑誌掲載のものに何度も加筆訂正を加えた（詳細は今坂晃の『『天平の甕』における本文改訂の様相』、桜美林大学中国文学論叢（十四）、一九八九年三月、第二一七～二四四頁を参照。）歴史的事実と合わない記述を訂正したほか、作中人物、特に留学僧達の描写に対する訂正も多く、注意を拂うことが必要となる。初出と単行本（中央公論社、一九五八年十二月）を例に見ると、唐の大福先寺の生活が始まった普照、栄叡と玄朗の三人について、初出では「自由な時間は盡く都の名所佛蹟の見物に當

ててゐた」（第一回連載、第三四六頁）と簡単に書いてあったが、単行本ではこの一句の後に、「眼に触れるすべての物が驚愕と讃歌の材料であった。三人の若い僧には日本という國も、奈良の都もひどく小さく貧しく思はれた」（第二九頁）と付け加え、唐の広さと新鮮さに関心を示している留学僧達の心境描写に工夫を凝らした。そして、初出では大津浦から乗り込ん来た戒融は「普照と同年配であった」（第一回連載、第三四一頁）と書いたが、後は「大柄な體のどこかに傲慢なものをつけていた」（第一六頁）と人物イメージを表す肝心な一句を付け加えた。それから、業行を「怖い」（第一回連載、第三五一頁）と言う玄朗の言葉を、「変わっている」（第四三頁）と訂正した。更に、普照の眼に業行の体は「ひどく小さくなったように見えた」（第三回連載、第三七三頁）を「業行の貧弱な體が前屈みに折れ曲つて不具者のように見えた」（第一一二頁）と訂正する等の細部に拘り、留学僧のイメージ作りに大いに力を入れることがわかる。

⑥山田博光、井上靖『天平の甕』、『国文学解釈と鑑賞』、

一九七〇年、第一〇一頁～一〇二頁。

⑦趙秀娟は「歴史の「真実」から芸術の「自然」へ―井上靖の歴史小説『天平の薨』の人物表現について―」（『井上靖研究』第四号、二〇〇五年、第三十頁）の中で、「歴史に忘れられた無名な人間たちの努力も忘れてはならない」と業行の「努力」も論じた。

⑧青木和夫ほか 校注、『続日本紀 三』（新日本古典文学大系14）、東京：岩波書店、一九九六年、第四三〇～四三二頁。

⑨安藤更生、『鑑真』、東京：吉川弘文館、一九九八年、第二三頁。その前の大著『鑑真大和上傳之研究』（平凡社、一九六〇年）でも安藤更生は、日本は戒師を唐土に求めることには「何か政治的意図が隠されている事を揣摩せしめるものがある」（第六四頁）と指摘しながら、戒師の招聘と行基の宗教活動を詳しく論じた。

⑩井上靖、「椿」、平成元年七月一日発行の『すばる』七月号（第十一巻第七号）に発表。（『井上靖全集』第一巻、東京：新潮社、一九九五年、第二一七頁。）

⑪井上靖、「戎衣」、平成元年五月一日発行の『すばる』

五月号（第十一巻第五号）に発表。（『井上靖全集』第一巻、東京：新潮社、一九九五年、第二一五頁。）

⑫井上靖、「船のことと港のこと」、昭和五十一年十月に日本海事広報協会発行の『ラメール』創刊号随筆欄に発表。（『井上靖全集』第二五巻、東京：新潮社、一九九七年、第七一七頁。）

⑬小田島本有、「自己本位型人間から献身型人間へ―「天平の薨」における普照の変貌をめぐる―」、『井上靖研究』第一六号、二〇一七年。

⑭井上靖、「天平の薨」の登場人物」、「アカハタ」一九六一年五月十七日号（『井上靖全集』別巻、東京：新潮社、二〇〇〇年、第一八六頁）。

⑮井上靖、南俊子、熊井啓等スタッフ座談会、「特集天平の薨1 中国ロケによる壮大なスケールの青春ロマソン」、キネマ旬報、一九八〇年二月上旬号、第五九頁。

⑯井上靖、「天平の薨」の読み方、一九七四年（『井上靖全集』別巻、東京：新潮社、二〇〇〇年、第一九二頁。）

⑰井上靖、「僧行賀の涙」、『中央公論』一九五四年三月号（『井上靖全集』第四巻、東京：新潮社、一九九五年、

第一九一、一九五頁。

⑱ 井上靖ほか、『歴史・文学・人生―井上靖対談集』、東京・牧羊社、一九八二年、第一四四頁。

⑲ 井上靖、『わが文学の軌跡』、中央公論社、一九七七年、第六三―六四頁。

⑳ 井上卓也、『グッドバイ、マイ・ゴッドファーザー』、東京・文藝春秋、一九九一年、第一〇〇頁。

㉑ 同注⑲、第六二頁。

㉒ 井上靖、『新発見 井上靖中国行軍日記』（昭和十二年八月二十五日―昭和十三年三月七日）（新潮社、二〇〇九年）、第二二三頁。

㉓ 井上靖、「瞳」、一九四七年神戸市クラルテ文学会発行の『クラルテ』第四号に発表。（『井上靖全集』第一巻、東京・新潮社、一九九五年、第二七頁。）